病理に対する認識の問い直し

2018 年 4 月 18 日　鈴木咲衣

“病理”ってなんだろう？べてるの家から帰ってきて、ますますわからなくなった。出力したいことは頭のなかにごちゃごちゃに入っていて、人に伝える段階はまだ遠いように思える。だからここでは、記憶に残った事実と感情を羅列する形で、でも何が残ったかというところに思想が現れるような形で、報告をしようと思う。

前提として、私は他の二人のように臨床心理学や教育心理学などで、いわゆる人の弱さや病理に専門的に関わったことがない。だからべてるの家に行くまえには素朴な経験のみがあった。「素朴な経験」というのは、自分や家族、友達の中の病理に関するものだ。ここで “病理” と表現するのは、私が暗に「治す」ことを前提としてきた症状だからだ。べてるの家を見てきた今は、それらを病理と呼ぶことに違和感を覚えるようになっている。頭ではなく身体感覚として。

だから、べてるの家に行く前は、私たちの探求する「出力の場[1]」はまだ抽象的な理想であって、理論的な研究という認識だった。結果として、その認識は見事に覆された。どんな論理よりも強力な、実在によって。

∞

べてるの家では 3 月 27 日と 28 日の 2 日間見学させてもらった。26 日の夜千歳空港に降り立ち、翌日朝 6 時半に千歳を出発して 2 時間半ほどレンタカーで海沿いを走った。途中いくつかの小さな漁師町やサラブレッドの牧場を抜けて、べてるの家はその道沿いにあった。開かれているんだな、というのが最初の印象だった。例えば街の奥に隠そうというような意図は少しも感じられない。

約束の時間より少し早く着いて正面から入ると、池松さんという男の人が案内してくれた。職員ミーティングがもう少しで終わるから少し待っていてほしいということだった。ほどなく二階に案内されて、二つつながった長机で作業をしていた職員の女性が、一つの机を離して私たちへのオリエンテーション用にしてくれた。

その女性は和田さんという名前で、無防備で可愛らしい雰囲気の、半径 50cm くらいに纏う空気をほんのり明るくするタイプの人だった。最初の自己紹介で、池松さんも和田さんも、当事者メンバー[2]だということがわかった。おお？と思った。見た目には、少なくとも私には、当事者メンバーとそうでない職員の境はまるでわからなかった。和田さんは続けてパンフレットなど配りながらべてるの家の沿革や理念、組織体制や活動内容を説明してくれた。

べてるの家は 1984 年に設立された。前身として「回復者クラブどんぐりの会」がある。早坂潔さんはじめ、どんぐりの会の有志数名が 1978 年に浦河教会を拠点として活動を始め、1983 年には昆布の袋詰めの下請け作業を開始した。そこから販売業や出版業も行うようになり、グループホームや共同住居が増えていった。それらの活動は徐々に注目を集め、日本精神障害者リハビリテーション学会や日本統合失調症学会が浦河で行われるようにもなった。パンフレットにはべてる家の理念や大事にしていること、当事者の声などが親しみやすいイラストとともに紹介されていた。

私は話についていこうと集中しながらも、周りにいる人々に関心が向いていた。小学校の職員室にホワイトボード付きのワークスペースが併設されているといった様子の広々とした一室で、その時はだいたい 20 名くらいがそれぞれに動いていた。指令系統はなく、個々人がマイペースに動いているように見える。そこにいるひとびと（当事者メンバーかどうかに関わらず）の間には壁や境目がなく、混ざり合って溶け合ってひとつの世界観ができているようだった。ひとびとは「無防備」で、その背後には「信頼」や「安心」が見える。私の慣れているコミュニケーションでは、頭で考える段階と伝える段階にもう少し間がある気がする。その間の背後には「警戒」や「自己防衛」が見え

[1]出力の場とは：病理を隔離したり矯正するのではなく、その人の世界の見え方を表現するための触媒としてはたらくような環境。単なる保護空間でなく、自己と他者が fair に出会い、互いの出力の成果を認め合いながら、対等な関係で学びを得られるフィールド。参照 URL: `https://kiocot.tumblr.com`

[2]べてるの家では統合失調症の利用者さんも運営に携わっている。

る。べてるの家のなかでは、でもそれは全く意味のないことのように思えた。私たちだけが不必要に纏っている防具服が、なんだか滑稽だった。

一通り説明が終わると、町に点在している施設を見学してまわった[3]。事前勉強を怠った私は、施設が街に点在していることをここで初めて知った。

施設めぐりの車の中で私は混乱し始めていた。なんでこんなこと（べてるの家で起こっていること、それがどんなことであれ）が可能なんだろう？と、自分の中の経験や知識を拾い集めてもうまく繋がらなかった。

午前中の最後に、和田さんが車を停めてその辺りを歩いていたお兄さんになにげなく声をかけた。そのお兄さんは私たちを近くの建物の中に案内してくれた。建物の中に入ると地域の人々と思われる老若男女がお昼ご飯を作って配膳していた。一瞬コミュニティセンターかな？と思ったけれど、実はそこは浦河ひがし町診療所（精神科・心療内科）で、お兄さんは高田さんといって、ソーシャルワーカーとしてそこの副院長をされている方だった。人々はデイケアで来ている患者さんだった。ここでもまた、おお？となった。そこは「精神科・心療内科」から連想されるようなうす暗く重い雰囲気は全くなく、たとえば「市民食堂」という名前から連想されるような、会話や日常が繰り広げられる場、といった様子だった。しかもそれを売りにしていないというか、変な演出がないというか、それがあたりまえにある日々の風景として、それに戸惑っている私たちだけが宙に浮いて取り残されているというかんじだった。

人々を抜けて建物の少し奥に入ると、高田さんは診療所立ち上げの時の話しをしてくれた。その話によると、赤十字病院で看護師不足により病棟を減らす必要がでた時に、消去法で精神科を閉じることになった。赤十字病院の精神病棟は閉鎖病棟を含んでおり、閉鎖病棟の患者さんの全員の生活を病院の外で成り立たせるのは容易ではなかった。しかし苦労しながらも、なんとか、べてるの家とも連携しながら町の中でケアし支え合える環境を作っていった。閉鎖病棟は病理を病理にし、患者さんの社会復帰を遠ざける。しかし家族や面倒を見る人々の負担を考えるとやむ負えない、と判断された患者さんが入ってくる[4]。「閉鎖病棟の床数を減らす」というと無理だったと思うが、「閉鎖病棟を無くす」というミッションで、地域ごと変えていく必要があったからできた。とのことだった。

ここでもわたしは「狐につままれた」というような気持ちになっていた。ストーリーはとても自然で、合理的で、無理なく物理法則に従っている、という印象だった。（だって閉鎖病棟みたいな人の生活形態として不自然な場所をキープするのってものすごくエネルギーがいると思うから。）でも現実ってそんなに単純だった？「そうすればいいのに」と思ったときにはいつも、何かしら人為的で不自然な不都合が立ち現れて、まあそれが社会だよね、というような諦めや絶望が次に来て、結局理想を打ち立てる理論が先に立って、それから草の根運動の名の下にその人為的不自然を取り除くための膨大な労力と時間が割かれて、目に見えない（時にはあからさまな）圧力に苛まれ、人々は疲れ果てて諦めて、目の前でできることをしようという結論に行き着いて、もしくは問題設定がずらされて元の問題は忘れられ、でも結局ほどなくまた同じ問題に帰着し、繰り返し、繰り返し . . . という手順は？

混乱が混乱を増した頭で、べてるの家の施設のひとつであるカフェ「ぶらぶら」にお昼を食べにいった。ここでも当事者メンバー方々が働いていて、普通にくつろいだ私は、それを後日説明されて知った。

ぶらぶらにはべてるの家の利用者さんたちが作った小物や絵葉書、べてるの家に関する書籍などが並べられて売られていた。奥には夏に開催される「べてる祭り」の催しのひとつである幻想妄想大会の表彰状が飾られていて、その内容が秀逸で、いくつかを 3 人で読んで笑いあった。この笑いはとても独特な質のもので、無防備な人間らしさに触れたときに溢れる笑い、衝撃、憧憬、それと対になる自分に対する失望、身につまされる感じ、みたいなものも混ざっていたような気がする。私

[3]べてるの家の関連施設（シェアハウスやデイケア、カフェなど）が町全体に点在している。

[4]最近も兵庫県三田市で、精神障害の息子を 20 年以上監禁したとして、父親が逮捕された。べてるの家に行った後で、なんともいえない気持ちになる。家族だけで抱えなければならないことの不安や負担は計り知れない。

はなんともいえない自分の心の動きを覚えておくために、一枚一枚写真に収めて席に戻った。まだ頭は混乱していたけれど、遠くに少しだけ、懐かしいような温かな気持ちを覚えていた。

∞

浦河は北海道の日高振興局の沿岸にある町で、北に日高山脈が見えて南が太平洋に面している。べてるの家では、利用者さんたちが日高昆布の袋詰めなどの加工業を行っている。社会の一端を担う安定した仕事がある、というのは大きい。また、浦河だけに限ったことではないが、地方では若者離れによる過疎化が進み、どこも町を維持するのに苦労している。そのような状況下でべてるの家は、利用者さんが移り住み（べてるの家を利用するには浦河の住民票が必要とのこと）、私たちのような見学者が毎年 2000 人以上訪れる。その経済効果は大きいだろう。さらに防災という観点からも、べてるの家は重要な役割を果たしている。浦河は海沿いの町で地震も多い。べてるの家の関連施設は浦河全体に広がっており、防災計画を市と協力して作り上げている。さらにこれらの町全体の協力を可能にする背景として、アイヌ民族の語りの文化もある。人々は語り、語りを通じて支え合いの網が作られていく。

産業、過疎化、防災、アイヌ民族の文化。統合失調症を持っていても社会の支え合いの一部を対等に担う。そのしくみが重層的に設けられている。さらに近くに信頼できる精神科のお医者さんがいて（べてるの利用者さんはほとんどその先生にかかっている）、気さくなソーシャルワーカーさんがいて、警察や町のお肉屋さん[5]も巻き込み助け合っていて、海が綺麗で、日高山脈に見守られている。これだけ揃ってしまうと、ともすると、幸運の名の下に特殊な例として位置付けられてしまいそうだ。でもそれって本当にそうなのかな。確かにそれらはこの地域特有の資源だけど、でもそれは結果としてであって、本質的に重要なものは、それに依らないなにかだという気がした。それをもっと明瞭に理解したいと思った。

∞

2 日目はべてるの家で昆布の袋詰めを手伝わせてもらった。昆布を乗せた机を囲み、利用者さん達といろいろなことを話した。途中「お姉さん、なんか悩みごとはないのかい？」と正面から尋ねられて戸惑った。なんの含みもない、何者でもない「私」への問いかけ。

彼らと話していると、とても安心した。一人一人が主体で、それぞれが自分の意見を話していた。それってあたりまえだけど、でもどこかに所属して何者かである人たちから発せられる言葉は、あなたは誰で、本心はどこで、それはどの立場で言ってるの？と不信感を抱いてしまうことがある。「統合失調症」とひとくくりにされても自分たちは一人一人違う人間で、それぞれの人生を紡いでいるんだという自尊心と、その人生たちが交差する中で自分も誰かを支えて生きるんだという責任感と、自分と向き合って、自分を知っていて、それを通じての人間理解がある。だから他人を受け入れる土壌がある。言うならば彼らは助け合いのエキスパートで、スキルを持っている。それは普遍的な価値だと思う。

∞

始めに戻るけれど、病理を病理としている間はそこに対等な関係は作れない。一方は治し、一方は治してもらう。一方は面倒を見、一方は面倒を見られる。病理がない状態が正常であり、正常であることを目指す。正常でないと「それは大変だね」という優しい言葉と一緒に主戦力から排除されてしまう。

「べてるの家では困難が人を結びつける。だから、上手くいかないことこそが順調。」

. . . あれ？それって、いまとなれば、ん？あたりまえじゃない？

この身体感覚を失わないようにしたい。

∞

さてこれからどうしよう。久しぶりに人を信じられる心境になったところで。

[5]お肉屋さんの前でぱぴぷぺぽ状態になっためぐみちゃんは、お店のひとにコロッケをもらって治ったそうな。